

2019年
11月18日
月曜日

趙 怡 教授（比較文学・比較文化）

ランバス一家と上海

関西学院では創立者ランバスがアメリカ人宣教師の両親の赴任先だった上海で生まれ育ったことは周知されている。ただ上海での活動は、「麻薬中毒療養所を開設」した程度のことしか知られていない。私は上海租界の歴史文化を研究しているので、ランバスと上海について調べてみた。

まず上海で発行された新聞のデータベースを検索すると、いくつかの記事がヒットした。中国語の『申報』には、ランバスが蘇州「博習医院」を開設したことを報じた記事（1883.11.20）、宣教師が現地の人と起こした土地売買の訴訟がランバスの仲裁によって解決された報告（1907.5.7）などが見られる。英字新聞 *The North China Daily News* からは中国の事情を紹介する氏の投書もいくつか発見できた。一九二一年ランバスが横浜で亡くなった時の訃報、上海の教会で葬式が行われた記事、教会関係者が書いた追悼文な

ども英字新聞や教会の関係誌に掲載されている。長年上海を離れたものの、依然流暢な中国語を話せたランバスは、「藍華徳」という中国名で現地の人々に親しまれていた。

アヘン戦争後に開港された上海は、外国人居留民が行政自治権や治外法権を持つ「租界」の設立と拡張によって発展した。中国の主権が著しく侵害された半植民地的な性質を持つ一方、世界の自由都市として近代化が進み、アジア随一の国際都市に変貌した。キリスト教の受容も日本以上に広がり、南メソヂスト監督教会（中国語訳は「監理公会」）は大きな影響力を持っていた。上海で三十年以上を過ごしたランバスの両親も草創期の宣教師として名を残している。

一九三五年に出版された『中華監理公会年議会五十週記念刊』に、教会の歴史と宣教師の伝記が掲載されており、ランバスの両親（藍柏先

生）夫妻）に関する紹介も写真と共に含まれている。二人は教会建設や印刷所設置に尽力し、無料で宿泊できる小学校や女学校も数校設立した。夫婦の教えを受けた老人の回想によると、二人は温厚誠実な人で、自宅を礼拝室や教室として開放し、病人を自ら看病したこともあるという。

ランバス家の住居は、英米の共同租界とフランス租界の境となる川にかかった「鄭家木橋」の近くに建てられており、中国人の旧城にも近い。この界隈は、英（米）・仏・中三方の統治から逃れるごろつきが集まり易く、アヘン館や娼館も多く、治安の悪い地域だった。ランバス一家はここに住み続け、現地の人々と垣根なく付き合っていた。父親は手押し車や船で上海の郊外や蘇州まで伝道活動をしに行き、幼いわが子を同行させたこともあった。

このような両親のもとで育ったランバスは、自然に中国の人々との距

離も近かった。「医療伝道」の道へ進む志も、貧しい人々を救うために生まれたに違いない。彼はのちに「中国——一つの解釈」というエッセイのなかで、「率直な男らしい強さと忍耐力にかけては、中国人に勝る国民はない。中国人は粘り強く土にしがみついて、ほとんど不屈と言ってもよいくらいである」と語り、揚子江を遡る舟を引いている「隆々たる筋肉と青銅色の皮膚」を持つ苦力たちを「タイタン」と讃えている（『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』二五頁）。中国人を「東亜の病夫」と揶揄して差別する西洋人が多かった時代に、民族や身分を超えて世界の人々を兄弟や隣人として見るランバスの世界観は、根底にキリスト教が唯一無二である思いがあったとはいえ、評価に値するだろう。そしてこの世界観を形成させたランバスの原点は、上海の「鄭家木橋」にあったのではないかと考える。